

異文化間・異言語間コミュニケーションの視点から見た 通訳教育の多面的効果

熊谷ユリヤ (札幌大学)

Abstract

This paper summarizes the result of action research conducted by this writer between academic years 1999 and 2001. The purpose of this research is to verify the hypothesis that students can gain multiple skills and knowledge through the subjects designed from the view point of inter-cultural and inter-linguistic communication.

Subjects related to interpreters' training taught at universities tend to focus either on the interpreting skills themselves or adapting interpreters' training methods to English language education. The subjects this writer teaches, originally designed as the subjects not related to interpreting, however, aims to bring a multiple effect rather than focusing only on interpreting or English language skills.

This writer's observation, analysis of the students responses to the questionnaires and their essays recognize a wide range of positive by-product in the subjects. It includes public speaking skills, both in English and Japanese, as well as inter-personal skills in both Japanese and English cultures. Also identified were an increased interest in current affairs, both domestic and international, and the theory of communication between high-context and low-context cultures. Awareness of lack of English proficiency required to interpret was suddenly a matter of great concern for the students, which led them to study English eagerly and make it a habit.

In conclusion, it was found that the students' interest in cross-cultural communication as well as motivation to study English from different perspectives have been greatly enhanced because of interpreters' education designed from the view point of inter-cultural and inter-linguistic communication.

I. はじめに

従来、日本における通訳教育は、民間の通訳者養成学校により行われてきたが、近年、全国の大学、大学院でも、様々な種類の学習者に対する異なったアプローチによる通訳科目をカリキュラムに含める傾向が見られ始め、1999年までには全国で23から28校を数えて (Tsuruta, 2000)、更に増加を続けていると見られる。

日本の大学・大学院に於ける通訳教育を考えると、英語・日本語間の通訳に関連した内容が大多数であると思われる。専門性が高い順に考えるなら、まず、極めて高度な英語力を大前提とした大学院や一部の大学の通訳学科に於ける、プロフェッショナル・レベルの通訳者・通訳論研究者養成を目指す教育、すなわち、諸外国の大学院で行われているレベルの、理論と実践を伴った講座が挙げられる (Gile, 1995, p.210)。次に、一定以上の英語力を有する学生に対する「通訳法」「通訳研究」「通訳論」等がある。更に、様々な英語力を有する学生を対象とし、実用英語運用能力向上のために通訳訓練法を取り入れた英語教育がある。

しかし、ここでは筆者が担当する二科目に関して、多面的教育効果をねらった講義の内容、授業の客観的観察、指導側からみた目標達成度、アクション・リサーチの一貫として行った記述式アンケートにみられるフィードバックを紹介したい。更に、実技試験に見る、学生が感じている達成度に関する反応をまとめる。それにより、たとえ本来正式な通訳講座としてカリキュラムに含まれていなかった科目の枠内であっても、多面的効果をもたらす得ることを検証したい。

II. 科目の特色

冒頭で触れた大学院・大学における通訳関係の科目数は、カリキュラム上でも「通訳」という語が正式の科目名として含まれているものである。しかし、実際には、科目名に「通訳」という語が一切含まれなくとも、通訳訓練法を応用した教育を行っている、あるいは他の科目名のもとでの「括弧付き」の通訳教育を取り入れている学部・大学院等が存在する。

その一つである札幌大学外国語学部英語学科では、平成11年より、英語専攻科の学生に対して、必修の「異文化コミュニケーション特殊研究(通訳)」を開講し、更に、平成12年からは、学部レベルにおいても3、4年生を対象に、選択必修の「英語表現研究C(通訳)」を開講し、平成13年度末までの3年間で二科目計160名あまりが履修している。クラスサイズは、7名から約60名の大人数まで様々であるが、LLのペアトーク機能を使用することで人数の問題は、深刻なものではない。学内兼任教員として筆者が担当するこれら科目は、それまで他の教員のもとで、括弧部分なしの本来の科目名に添った内容で指導されていたが、現在は、便宜上「(通訳)」を付加している。このため、本来の科目に関する内容も講義に含めることが必要となり、結果として多面的効果をねらうものとなった経緯がある。講義中の各内容に費やす時間の比率、副教

材の難易度、評価基準以外の点は共通であり、主な特色としては次の五点が挙げられる。

1. 理論的側面

講義時間の約3分の1から4分の1程度にあたる時間を割いて、専攻科目の本来の目的である「異文化間コミュニケーション論」、学部科目本来の目的である「英語表現」を念頭においた、「異言語間コミュニケーション論」を取り入れる一方、「国際ビジネス交渉論」「多様化する国際語としての“World Englishes”論」にも触れている。

2. 擬似体験としての通訳者養成講座

通訳講座を受講する上で、極めて高度な言語運用能力を大前提とする諸外国とは異なる日本に顕著な傾向として (Baker, Mona Ed., 1998)、学習者の英語力・語彙力によっては、通訳技術そのものもさることながら、ソース・ランゲージのリスニング理解、ターゲット・ランゲージでの訳出・語彙・表現そのものに対する指導に偏る恐れがある。そこで、必ずしもプロ通訳者養成を目的とせず、大学における英語の授業に通訳訓練を導入する場合、「通訳訓練技法の一部を取り入れて直聴速解・直読直解力など英語運用能力促進をはかる」方法、「通訳技術そのものを指導し、あるいは応用することにより通訳訓練を行う」そして、「通訳を含む総合的な講座」などが考えられる。

英語運用能力向上の例としては、リテンション技術向上を目的とする同時通訳訓練法で、英文を聴いて数語遅れでリピートする「シャドーイング」を、LLを使用した聴解訓練に取り入れる方法 (玉井, 1998)、あるいは意味のまとまり毎に、声に出さずに文頭から訳していく「サイト・トランスレーション」を応用した速読訓練などが挙げられる。通訳訓練の例としては、単語・単文リピートや通訳に始まり、メモ取り訓練を経て、まとまった長さの逐次通訳訓練を基礎とし、次の段階として、シャドーイングなどの同時通訳訓練をする方法と、両者を並行して行う方法が考えられる。

筆者が担当する講義は、教材のレベルを平易なものにする、あるいは対訳教材を用いることにより、英語力による前提をクリアした上で、逐次とウィスパリング同時通訳訓練を行い、その派生物としての多面的な効果を期待するものである。通常、講義時間の約2分の1、時には3分の1を「擬似体験としての通訳者、異文化・異言語間コミュニケーター養成講座」にあてている。そこには、要約訳や意識により逐語訳・直訳の癖を排除してコンテンツを理解し表現力をみがく訓練も含まれる。前期は英語から日本語の通訳、後期は英語から日本語および双方向の通訳が中心である。教材が比較的平易であるため、講義中の実技は、訓練方法指導、テキストを用いてのデモンストレーション、パートナー組んでの通訳練習とし、自宅学習は復習のみを義務づけている。

3. 現場との一体感

研究のフィールドワークの一環として現在も会議通訳者活動をおこなう筆者の体験的通訳論、文化や商習慣の違いを踏まえたコミュニケーションのための実用的知識、また、守秘義務を遵守した上での、匿名の通訳現場からのフィードバックにより、現場との一体感を与えることが第三の特色である。このケーススタディとディスカッションに、講義時間の約3分の1から4分の1をあてている。

更に、筆者が実際に同時通訳活動を行う場面に学生が聴衆として参加することが可能な場合は、あらかじめ周知して来場を奨励する。また、適宜ゲストを招いてスピーチをしてもらい臨場感溢れる通訳を体験させること、外国語関係のボランティア団体に登録させる、あるいは、英語圏からの交換留学生に対するボランティアとして活動し、その結果をクラスで報告する機会も提供している。

4. 教材の工夫

通訳者の編集による市販の通訳教本を主教材としながらも、日英対訳スピーチ教本、通訳現場で使用された原稿を主催者の許可を得た上で加工した原稿も使用している。また、高度な英語力を前提とし通訳技術に焦点をあてた講座では、CNNなどの英語ニュース番組を、通訳訓練のソース・ランゲージ教材として使用することが多いのに対して、これら講座では、ビデオ教材のインタビュー・スピーチ場面、テレビで放映された来日映画スターの記者会見や、TVショッピング番組で外国人デザイナーが通訳者を介して作品を紹介しているビデオ、ならびに、主催者やスピーカーの許可が得て実際の通訳現場を録画したビデオも副教材として使用する。

5. 派生的効果のために

(a) インターネットサーチ： 上記、II-1. に挙げた「異文化間コミュニケーション論」、「異言語間コミュニケーション論」、「国際ビジネス交渉論」

「多様化する国際語としての“World Englishes”論」と通訳者のかかわりや役割についてのリサーチを課すことにより、担任教員以外の通訳者、日本通訳学会等の研究団体などのウェブサイトから生きた情報を学ばせる。

(b) スピーチ・コミュニケーション： 通訳・英語・異文化コミュニケーション以外の面では、初めにパブリック・スピーキング能力向上が挙げられる。

「通訳者は、プロの話し手である」(Gile, p.215)と言われるように、通訳には伝達性の高い話し方・会場に合った声の大きさ・明確な話法・割舌の良さ、政治的に正しい語彙選択、適当な非言語コミュニケーションなどが不可欠である。また、英・日通訳に必要とされるフォーマルな場面での日本語、学生言葉の払拭、人前であがらずに話す訓練法の指導がある。

(c) 対人コミュニケーション： 初対面のクライアントやオーディエンスに好感を与え、短時間で信頼関係を構築し支持を得るための対人コミュニケーション

ョン技術、すなわち、文化の違いによる、対人距離、時間の感覚、視覚的印象を含む非言語コミュニケーション面も言語面同様、取り入れている。

III. 目標

上記 II. に述べた五点の特色は、次のような目標を達成する手段である：

1. 通訳技術を支える背景多識・基礎知識としての異文化コミュニケーション論、英語表現論、国際ビジネスコミュニケーション論、多様化する国際語として英語論等の多面的知識習得により、通訳専門学校との差別化をはかること
2. 予習・復習を要する、高度の緊張感を伴う、これまで経験したことがない分野の実技指導により、通訳および一般の英語のリスニング・スピーキング力に必要な集中力と技術を養う。一方、語彙力を含む基礎的な英語力など、自分に欠けているものを自覚させ自主学習の動機とする。また、通学途中など日常的に用いることのできる学習方法を身につけさせること
3. 英語・コミュニケーション学習の身近な役割モデルとしての筆者の通訳活動／フィールドワークを教育の場に還元することにより、学生の動機・意欲を向上させること
4. 実際に用いられた素材を学生の英語レベルに合わせて加工した、臨場感のある教材の使用、ウェブサーチにより、異文化・異言語間コミュニケーションにおける通訳者の役割を理解させるとともに、一通りの通訳訓練メソッドを学びある程度までついていくことができたという自信を付与すること。
5. 「深く狭い」通訳教育よりはむしろ、多面的な派生的効果に主眼をおいた「浅く広い」総合的な科目として、技術・知識・教養を身に付けさせ、多様化、グローバル化する将来において、それらの技術・知識が必要になった場合に供えたインデックス、あるいは、引き出しを構築すること。

IV. アクション・リサーチ

筆者が日常的に、あるいは前年度から今年度、次年度に至るサイクルのなかで行っているアクション・リサーチは、教員が主体的・客観的に授業を観察して課題・問題点を特定し、解決のために次の指導計画を作成して実践し、更にそれを観察していくという、継続的・循環的な *reflective teaching* である (Cohen and Manion, 1994)。

授業の観察は、講義のビデオ撮影、学生には周知せずに行う講義の録音、および講義中に気がついたことを逐一記した講義メモの分析からなっている。また、フィードバックについては、新学期に筆者の電子メールアドレスを知らせ、欠席届にはメッセージやアドバイスを添えて返信する、あるいは「授業につい

ていくことが出来ない」、「一度あきらめて放棄しかけたが復帰したい」などの相談のメールを気軽に受け取りカウンセリングできるようにする一方、研究室ホームページには、講義メモを掲示し、講義の感想やフィードバックを書き込みやすくした。また、講義の後に、可能な限り学生たちと気軽に話をし、その日の感想を引き出すよう務めた。

各学期の最初と最後の記述式無記名アンケート、下記・冬季休暇明けに提出する研究レポートにより、上記 II. と III. で筆者が意図した多面的効果、目標達成度を確認している。また、学期中に得た学生からのフィードバックも考慮し、「内容が濃すぎる」「レベルが高すぎる」「ペースが速すぎる」「インタビュービデオで練習すると実感が湧くので時間を長くしてほしい」などの声を反映し随時修正する、あるいは、リクエストに答えられない場合や、ストレスの多い練習が不可欠の要素の場合は、なぜそれが必要なのか、具体例を用いてクラスで説明してきた。

V. 評価と観察結果

1. 学生に対する評価

指導側から見た各学生の目標達成度判定に関して、たとえ通訳者養成を擬似体験する形はとっていても、通訳技術の評価と英語力の評価とを区別し、通訳技術の習得度チェックの実技試験をおこなうこととした。前期の実技は、短い英語スピーチの日本語逐次通訳の出力・通訳メモ・全体的なスピーチ・コミュニケーション能力で評価し、更に、「異文化コミュニケーションと通訳者」に関するエッセイも課した。後期は、日本語スピーチの英語逐次通訳の出力・通訳メモ、そしてウィスパリング同時通訳を実技とし、「異言語コミュニケーションと通訳者」等に関する英語エッセイを課した。平常点は、各クラスで座席を指定し、訳出をLLのモニターでチェックした。

2. 学生のアンケート

A 4 版の記述式アンケートは、他の学生が実技試験の練習、あるいは受験中に、十分な時間をかけて記入することとした。以下、記述された内容からキーワードを複数回答の形で挙げる。

(a) 「全般的な感想」に対する記述として主な回答項目は次の通り。

i) 達成感 (各クラス約 8 割から 9 割の学生が言及) : 「大変だけどやりがいがあった」「難しいけれど楽しかった」「必死になったかがあった」等

ii) 感動から動機、自信へ (約 7 割が言及) : 「通訳は特別な人がすると思っていたのに、出来た」「今までに体験したことのない授業だった」「自分がウィスパリング同通をしているのは夢のよう」「内容が濃くて戸惑ったがやれば出来る」等

iii) 自分の力不足を実感 (約 4 割から 6 割が言及) : 「実用的な英語力のなさを実感」「非母国語の人の英語が聞き取れない」「集中力のなさを実感」等

iv) コミュニケーションに対する意識 (約3割から4割が言及): 「通訳や英語と対人/異文化間/異言語間コミュニケーションを結びつけるようになった」「漠然としていた異文化コミュニケーションが具体的になった」等

v) 自主学習の習慣 (約3割が言及); 「この授業が頭から離れなかった」「日常的にリピートやシャドウイングをする習慣がついた」「実践的なので教室の外でもやる気がでた」「ネットサーフィンで異文化コミュニケーションのウェブサイトをはしごするようになった」「地下鉄の中で聞こえてくる会話を頭の中で同通する癖がついた」「国際問題に関心を持つようになり、ニュースを見るようになった」等

(b) 「この科目で学んだことの中で印象的なことは？」という質問に対する記述として主な回答項目は次の通り。

i) 通訳の技術 (各クラスほぼ全員の学生が言及): 「ウイスパリング同時通訳」「通訳メモがあれば長い文も訳せる」「いざという時役立つ通訳の技術」「教員になるので、学校の行事で通訳をする時役立つ」等

ii) 通訳者の社会的地位・虚像 (約8割から9割が言及): 「通訳/通訳者に対する認識が間違っていた」「華やかで儲かるという印象しかなかったが、地道な努力が必要な過酷な仕事」「通訳は知的専門職なのに、生意気で派手なバイリンガルという間違ったイメージ」等

iii) パブリック・スピーキング (約4割から6割が言及): 「たとえ自信がなくても堂々とコミュニケーション出来るようになった」「丁寧語や敬語を交えて話せるようになった」「聞き手の身になり、スピーチ・コミュニケーションを意識して訳せるようになった」等

iv) 通訳者の役割 (3割から4割が言及): 対人/異文化間/異言語間コミュニケーションと通訳者の役割」「ただ訳すだけの存在ではないことがわかった」「言葉だけでなく文化も通訳」等

v) 通訳の仕組み (約2割から4割が言及): 「翻訳を音声にただけと思っていたのに全く違った」「同時通訳が手品や魔法ではなく技術だと知った」「英語力と通訳技術は別なことを知らなかった」等

(c) 「通訳やコミュニケーション以外で身についた知識・技術・態度等がありますか？」という質問に対する記述項目は次の通り多様である。

「学習意欲」「やる気」「日本語力・国語力に対する意識」「記憶力」「就職の面接対策」「日本人としての教養」「自分が好きになった」「女性の社会的地位」「対人関係に関する自信」「気配り」「世界情勢の知識」「時事問題に対する強い関心」「国際人の資格」「諦めない」「ねばり」「積極性」等。英語関係では、「速読力」「直読直解」「リスニング力」「語彙力」「サマリー力」「もっと英語を勉強してプロ通訳になりたい」「英語を使う仕事に就きたいという目標が決まった」などの意見がある。

(d) 「改善の提案、要望、その他」の欄に記載された項目も多様である。

「履修できる学年を引き下げてほしい」「次年度も継続して学べるようにしてほしい」「レベル別、段階別に複数年で学びたい」「クラスを増設して、小人数にし、実技やディスカッションに参加しやすくしてほしい」「普通の講義の何倍も苦勞をして、何倍も成果があるのだから、単位数も増やすべき」「自宅学習の課題を減らしてほしい」「思ったほど語彙が伸びなかった」など。

3. アンケート回答の分析

(a) 全般的な感想は、どのクラスも毎回類似した結果になっている。「自分の力不足」を「実感」しても、「今まで経験したことない新鮮な」分野であるため、挫折感よりもむしろ「自主学習の習慣」となり「達成感」「感動から動機」「自信へ」とつながった構図が浮かびあがってくる。講義の時間配分の比率にも関わらず、通訳訓練に関する感想が圧倒的に多く、動機付け効果として新鮮なインパクトをもっていることが分かる。

(b) 印象的な事項について、「通訳技術」と「通訳者についての虚像」の回答が多いが、「スピーチ・コミュニケーション」関連や、「文化の解釈者としての役割」も学生の印象に残っており、「通訳」という素材を通じて「広義でのコミュニケーション」を考える機会になっていることがわかる。

(c) (b) に挙げられたパブリック・スピーキングの技術や異文化コミュニケーションの知識を含め、純粋な通訳技術訓練以外の全てを、広い意味では派生的効果と呼ぶことができるが、特に、この項目に記載された多くが肯定的な意味での副産物・派生的効果にあたる。

(d) 要望・希望に関しては、筆者にとっては他学部である外国語学部のカリキュラムに関するものが多かったが、学生がこの科目の目新しさと内容を肯定的に捕らえていることの現われと解釈できる。

4. 教員による観察

学生たちの通訳技術の進歩は、座席指定のLLによるペアワークのモニタリング、課題の提出、教室の前に出た通訳実技、そして各学期末の実技試験での訳出率・正訳率にも顕著に現れている。90分授業の約半分の実技で、実際に反復練習に使う時間は短いですが、学生たちの英語レベルに合った自主学習課題と達成目標を与え、語学自習室でその成果を録音して提出させる、または、教室でビデオに録画しチェックするなどの試みにより、通訳訓練だけをとっても、指導側からみた目標はおおむね達成されたと考えている。また、異文化・異言語コミュニケーションにおける通訳者の役割理解もエッセイで確認されている。

問題点としては、履修放棄の時期には、就職活動で出席できない学部4年生のなかから、「欠席が続くと、ついていくことが出来ない」、「通訳講座は、もっ

と華やかで楽だと思っていたが、実際は違った」「4年生の出席を厳しくとらなくても、自宅学習が続くといやになる」等の理由で、年度により卒業に必要な履修単位を既に取っている4年生の約2割から3割前後、3年生の1割から2割前後が履修を放棄した。

VI. 結論

グローバル化と少子化の影響があいまって、大学の国際化・生き残りの面からも、「通訳」という語は、今後もキーワードとなって学生を惹きつけていくものと思われる。通訳訓練を活用した実用英語教育、通訳スキルを英語教育に導入する試みは、すでに国内の多くの通訳者により研究・報告されている。

今回取り上げた、異文化・異言語間コミュニケーションとコミュニケーターの視点に立った、体験としての通訳教育と総合科目としての講座は、カリキュラム改定が必ずしも容易ではない現状を踏まえて、たとえ科目名に「通訳」という語が含まれていなくても開設・運営が可能であり、学生の反応も良く、効果的である。毎学期、毎年度の主観的・客観的フィードバックに基づき、更に内容や指導法を、改善していきたい。

今後の最大の課題は、様々な科目名を持つ講義に、部分的にあるいは全般的通訳訓練を取り入れていく上で、いかにして通訳者、通訳経験者以外の教員にとって使用しやすい教材を開発するかであろう。各大学・学科の英語レベルに応じて、また、各要素の時間配分・比率に応じて選択できるようなモジュール式のテキスト、通訳あるいは模擬通訳、国際会議の現場を撮影したビデオなど、そして、詳しいマニュアル、そしてワークショップなどによるシェアリングの可能性も踏まえて、引き続き実験と教材開発を続けて行きたい所存である。

引用文献

- Baker, M. (Ed.) (1998). *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*. London: Routledge,
- Cohen, L. & Manion, L. (1994). *Research Methods in Education*, London: Routledge.
- Gile, D. (1995), *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training*, Philadelphia: John Benjamins North America.
- Tsuruta, C. (2000). Interpreter Education and Training at the Graduate and Undergraduate University Level in Europe. *Interpreting Research* 17, 68.
- 玉井 健.(1998). 「シャドーイングの背景理論と評価法」, 『シャドーイングの応用研究』, 日本時事英語学会関西支部同時通訳研究分科会. 1.